

# 北里柴三郎

◆鈴木喬著(歴史家)



昭和5年(1930)欧米学者の表敬訪問時  
(写真中央が北里柴三郎)



嘉永五年(一八五二)二月三日、京都の中山大納言の家では孝明天皇第一皇子の御誕生で喜びに沸いていた。この皇子は睦仁と命名され、これから一六年后に皇位につかれる、後の明治天皇である。

同じ年の二月二〇日、はるか西の果ての肥後国阿蘇郡北里手永の惣庄屋北里家にも一人の男の子が生まれた。柴三郎と名づけられたその子は、すくすくと育ったが、当時の世情を反映して将来の行政官を夢見ていた。

明治二年(一八六九)選ばれて藩校時習館に入学を許され、青春の希望をもって熊本に出たが、翌三年の藩政改革で時習館は廃校となり、やむなく新屋敷の榑原助之進知定の塾に学んだ。同四年、古城に熊本医学校が設立され、オランダの医師マンズフェルトが教授となつて来熊した。柴三郎は外国語習得の目的で入学したが、マンズフェルトから、「自分は単なる医者

の技術を教えるのが目的ではない。生涯研鑽に努める医師を養成することを教育方針としている。」と聞かされ、ここで生涯を医学研究に捧げる決意を固めた。以来マンズフェルトの下で助教を務めながら勉強に励んだ。

明治七年、マンズフェルトは任期を終って帰国したが、そのときこのあとは東京医学校に進学し、卒業したら欧州に留学して医学の向上発展に寄与するようにせよと助言を与えて去った。

柴三郎はその助言の通りにしようと考え、阿蘇の両親に相談したが、昔の惣庄屋の家も維新の改革で家計不如意となり、おまけに九人の子沢山とあっては、学資の送金は思いもよらぬ。父母は、自分の力でやっていけるならばしっかり勉強してほしいと上京を許した。柴三郎はまず大阪まで出て、そこで働いて東京での当座の経費を貯え上京

した。山田武市やまだたけしの家に世話になった柴三郎は、明治八年念願の東京医学校(後の東大医学部)に入学したが、学資を得るために翻訳の仕事の傍ら牛乳配達などもした。八年かかって卒業した同一年、彼はアルバイト先の縁で日銀総裁であった松尾臣善まつおしんぜんの娘と結婚した。

当時の我が国では結核やハンセン氏病患者が多く、またコレラ・チフスや赤痢・疫痢などの急性伝染病が毎年のように大流行していた。彼はこのよう



北里柴三郎生家



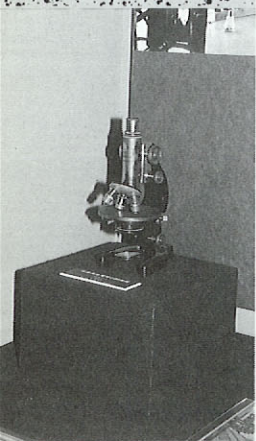
な状況を改善するには、公衆衛生思想の普及向上以外にはないと考え、内務省衛生局に入った。局長、長与専齋ながよとけんさくは若い頃大阪の通塾で学んだ人だけあって、人を見る目が鋭く、柴三郎が鶏コレラ菌を検出し、長崎に出張して患者からコレラ菌を純粋培養するなどの業績をあげたのを見て、プロシア(ドイツ)のコッホ研究所に留学させた。最初三年の予定であったが、彼の熱心誠実な研究態度に感じたコッホは二年間の留学延長を許可した。その甲斐あって明治二二年、彼は遂に破傷風菌が嫌気性菌であることを発見して、その純粋培養に成功し、その結果、菌の出す毒素によって発病することを明らかにした。柴三郎はさらに毒素の致死量を測定する実験中に、死なないう程度に薄めた液を注射して暫くたった実験動物に、致死量の濃厚液を注射しても全く発病しないという、免疫状態の発生を確めた。コッホにそのことを報告すると大変喜び、エミール・ペーリングのジフテリアの研究を手伝うように指示した。北里が手伝うようになって、ジフテリア

アも同様の毒素を出しており、破傷風と同じようにして免疫状態をつくり出せることがわかった。そこで免疫の本態を追求し、両者の血清療法を発見したが、これは世界的な大発見で、医学者としての名声は一躍高まった。今度コッホから北里に、さらに一年間の留学協力を依頼してきた。しかし、既に日本政府からの留学費は打ち切られてしまっていた。このとき駐独公使の西園寺公望が政府にその旨を申し送り、それが天皇のお耳に達して、お手許金一〇〇〇円を下賜されることになった。北里はそのお陰でコッホのツベルクリンの研究を手伝い、明治二五年五月帰国した。プロシア政府は外国人としてからはじめてプロフェッサーの称号を与えたので、米、英の大学ではこそぞって北里を招聘しようとして熱心に働きかけた。しかし北里は、天皇のお手許金で学問をさせて頂いたのだから、日本の公衆衛生のために働かなければならないと言つて丁重に皆断つた。

ところが帰国しても国は研究の場を提供できない。それを聞いた福沢諭吉は、芝公園の入口に小規模ながら伝染病研究所をつくつて無償で供与し、翌二六年、白金三光町に養生園を建ててやり、研究資金に当てさせた。そこで

の研究の間にペスト菌を発見し、志賀潔を指導して赤痢菌を発見させた。伝染病研究所は、三三年に国に寄付されたが、大正三年、ときの首相大隈重信は何の相談もなく内務省から文部省へ移管し、東大の付置研究所にした。北里としては、名称はともかくとして、伝染病の撲滅を目的とする施設は内務省の所管でなければならないと考えていたので、研究所長の職を退いた。しかし所員はそのまま研究を続けるよう指示したが、全員北里に殉じて辞職してしまつた。

北里は遂に部下全員の生活と研究の場を独力で用意することを決意し、この年北里研究所を創立した。同六年慶応義塾大学に医学部が創設されたとき、福沢諭吉の恩に報いるために献身的な努力をした。また大日本医師会を発足させて、終身その会長をつとめた。その後貴族院議員に勅選され、同二三年には学者としてはじめて男爵に列せられた。一生涯開拓・報恩・実践・不撓不屈の精神を貫いた大偉人も、昭和六年六月二三日忽焉として八〇年の生涯を閉じた。彼の生家は今も北里柴三郎記念館として小国町に保存・公開されている。



愛用の顕微鏡